

プレスブリーフィング概要

日時：平成23年8月24日（水）16：10～18：34

場所：第4特別会議室（経済産業省別館3階）

対応：森山原子力災害対策監

（説明）

<1F各号機の状況>

○1号機

- ・原子炉への注水、11：00現在、 $3.8\text{m}^3/\text{h}$ で継続。
- ・使用済燃料プールの冷却、11：00現在、水温約 29°C 。
- ・滞留水、原子炉建屋地下水位、本日11：00時点で昨日7：00から約3mm上昇。
- ・原子炉建屋上部でのダストサンプリング、26日に実施予定。

○2号機

- ・原子炉への注水、11：00現在、 $3.8\text{m}^3/\text{h}$ で継続。
- ・使用済燃料プールの冷却、11：00現在、水温 34°C 。
- ・滞留水、プロセス主建屋へ移送を継続。本日11：00時点、昨日7：00から、立坑は18mm下降。タービン建屋は約14mm下降。プロセス主建屋約138mm下降。
- ・原子炉建屋開放部のダストサンプリング、明日実施予定。

○3号機

- ・原子炉への注水、11：00現在、 $7\text{m}^3/\text{h}$ で継続。注水量を 6m^3 まで減らす予定だったが、圧力容器下部が安定せず、ゆるやかに上昇中。監視継続。今週末26日にコアスプレイ系からの注水に切り替える予定。
- ・使用済燃料プールの冷却、11：00現在、 31.6°C 。
- ・昨日16：03までタービン建屋地下の滞留水は、高温焼却炉建屋へ移送していた。昨日16：15から本日9：30までは、タービンから、ポンプ2台で高温と、プロセスに送った。実態は、高温にたくさん流れたようだ。9：30からはポンプ2台で、プロセスに送っている。
- ・大衆類の水位、本日11：00時点、昨日7：00から立坑水位は約25mm下降。タービン建屋は6mm下降、高温焼却炉建屋421mm上昇。

- ・原子炉建屋カバーの準備工事、がれき撤去、搬入路の整備作業を行っている
- ・建屋上部のダストサンプリング、本日9:00から10:30にかけて実施。

○4号機

- ・使用済燃料プールの冷却、11:00現在、水温40°C。
- ・滞留水、タービン建屋、本日11:00時点で昨日7:00から約26mm下降。
- ・屋上部のがれき撤去、高いところで作業する重機を組み立てている。
- ・プール循環冷却装置ホースからの漏えいについては、ホース交換の準備中。2Fで具体的な電子顕微鏡による観察準備中。

○5, 6号機

- ・6号機タービン建屋から、たまり水を仮設タンクへの移送。

○その他

- ・循環型の海水浄化装置、昨日から運転中。
- ・鋼管矢板の工事のため打設工事を継続。本日シルトフェンスノ開閉あり。

<海域でのダストサンプリング>

- ・本日から海上のダストモニタリングを実施する。地上12地点、原子炉建屋上部でサンプリング等、陸域は実施してきたが、陸は再浮遊の巻き上げがあつて、正確に測れていない。保安院からは従来から実施を促していたが、本日から海域でも、メガフロート上、また船で沖合3km地点も実施する。

<1F水処理関係>

- ・昨日15:07、サリー再起動、並列運転実施中。本日ベッセル交換等なし。
- ・累積処理量11:00現在55700m³、RO膜の淡水化8:00現在19580m³、蒸発濃縮装置の淡水化8:00現在1410m³。
- ・装置出口流量、キュリオン45.5m³/h、サリー26.6m³/h。
- ・RO膜淡水化装置1B(小さい方)、昨日16:00自動停止、ポンプ入り口出口流量不均等の警報あり。原因不明。18:20に再起動。

<質問回答>

- ・サリー装置が回収する物質の形状について、固体状か溶け込んでいるものか

というご質問。セシウムを主に採る、イオン状に水に溶けているものを回収している。

<水処理に係る東電からの週報(第9報)>

- ・サリー、開始している。今週は6780m³の処理。
- ・現在のキュリオン、アレバの稼働率は90%程度であり、今後1週間は10920m³、90%を想定している。

(質疑)

○ [REDACTED]
Q: 3号機の注水、高圧スプレイからは26日とのこと。現在7m³。これを減らし様子を見るとのこと。26日まで減らさないか。

A: 多分、あと2日くらいなので、注水継続して、26日から準備整えば開始する。

Q: まず、プラスするか。

A: プラスして温度見て、そのうえで減らすことになる。

Q: 温度が減ってくれば、減らすか。

A: どこまで減らすかは結果をみないといけない。

Q: 減らすのは給水系か。

A: そういう想定。入れてみないとよくわからない。期待はしている。

○ [REDACTED]
Q: ダストのサンプリング、期間1ヶ月とのこと。結果の判明はそのあとか。
A: 逐次公表してもらおう。まずは1カ月継続する、サンプリングしたものは、その都度、一覧表で公表されると聴いている。

Q: 一番早いのはいつか。

A: 明日か明後日が出てくる可能性がある。

Q: 注水、減らすのは、処理をしっかりとやるという趣旨か。

A : 全体として、抑え気味であるのは、汚染水を減らすということ。全体的な注水量を増やしていったら、100℃以下を目指す。

○ [REDACTED]
Q : 3号機、温度パラメータ、格納容器底部ヘッド上部、5℃弱ほど上昇して下がってない。9m³まで戻した方がいいのではないかと。保安院はどう判断しているのか。

A : 26日まで、今の状況が継続したとして、110℃とみている。

Q : せっかく、処理量増えてきた。給水量を基に戻した方がいいのではないかと。
A : もちろん、温度を低く保つ必要があるが、コアスプレイの準備状況等踏まえると、変えた時の効果もしっかりみるということからも、1日くらい問題ないと思っている。

Q : プラス7、8℃まで許容範囲と保安院として見ているのか。
A : 上がることはよくないと思っている。あと2日くらいで、急に上がればすぐに水入れる準備している。問題ない範囲。

Q : コアスプレイ、1m³ずつたしていくか。
A : まずは温度をみる。コアスプレイの効果があるか見る。

Q : 温度がさがるまで1m³ずつたすか。
A : 温度を見て減らなければ、さらに1m³たしてみる。検討しながら。

○ [REDACTED]
Q : 水処理システムについて、結局17日から23日までの稼働率は何%か。
A : 途中でサリーが入っているので計算する。

Q : サリー稼働で計算方法が変わったか。
A : 50m³定格で半分止めている状況。18日からサリーを入れている。運転モードだいぶ変わっている。稼働率の定義を検討中。まだ計算できてない。

○ [REDACTED]
Q : 2号機タービン建屋滞留水について。並列運転だから変えたか
A : サリーとキュリオン・アレバを並列で運転している。

Q : プロセス主建屋の方が容量が大きいか。

A : そのとおり。ポンプ1台あたり20m³。4台注3台を使っている。

○

Q : 点線が使うようになって、2台2台になるか。

A : もうしばらくしたら、2号機から高温焼却炉建屋、3号機からプロセス主建屋へ送る形になる。今はプロセス主建屋に3台で送っている。

Q : 今後は、2号機のプロセス主建屋を切って、高温焼却炉建屋に送る形になるのか。

A : そのとおり。

Q : 3号機はそのままか。

A : そのとおり。全体バランス見ながら移送する。

○

Q : 3号機から一つにまとめて、プロセス主建屋に入っている。今後2号はどうするか。

A : 今後2号はポンプ1台で高温焼却炉建屋へ。

Q : 2号機がサリーで、1、3号がキュリオン・アレバになるということか。

A : 当面はそう考えている。

○

Q : 一部報道で、2008年、東電の1F津波試算10mくらいとしていたとのことだが、承知していたか。

A : 東電が事故調査委員会に報告したという報道と承知。2008年にそういう試算があったことは、承知していない。私は担当課長だった。

Q : 耐震指針改定後バックチェックを実施。東電は津波の高さの計算をしているが、指針改定後、東電から保安院に報告はなかったのか。

A : 2006年9月に指針改定。保安院からバックチェック指示、2007年夏、中越沖地震。揺れが大きかったため、大臣から確実にできるだけ早く評価するよう指示した。揺れが大きかったこともあって、各事業者は中間の報告として、1プラントを選んで主要施設の評価を実施。それが2008年の3月末。津波の評価、その時点では出てきていたのは限られていた。

浜岡、柏崎、もんじゅもがでてきていた。2008の中間報告の時点で津波についての評価はすべて出てない。

Q: 2008年3月に、柏崎、浜岡、もんじゅか。

A: 浜岡は出ていたが、柏崎はちょっと、正確な時期はわからないが、津波の評価はやっていた。2008年中には提出されていたと思う。2009年に入って、問題ないと評価した。

Q: 1Fはでていたか。

A: 出てない。

Q: 保安院としては5mと認識していたということか。

A: 1Fについて、2008年の段階は報告を受けてない。中間報告まとめたのが、2009年の7月に1F5号機のバックチェックをまとめている。津波はまだ評価してなかったが、WGで指摘があつて、今後適切な措置をとることが宿題になっていた。その後の経緯については、2009年9月頃、東電から津波6m超えると口頭で説明を聞いていた。それから今年、地震が起きる直前、2011年3月7日、津波10m超える計算結果について、担当が説明を受けた。東電に対し早急に対策必要と担当から指導していた。

Q: 2009年9月、東電から説明があつたか。

A: 6m超えるという説明を担当に受けているようだ。資料等はもらってない。

Q: WGで指摘あつて、少し調べてそういう説明があつたということか。

A: わからない。6m超える可能性について口頭で説明、今年3月、震災直前に10m超えるとう評価結果の説明を受けている。

○

Q: それぞれの計算結果は、何に基づいているか。

A: 2009年は簡単に聴いた。2011年は、いくつかのケースを計算したと聴いている。

Q: それはバックチェックの枠組みと別か。

A: いずれは、バックチェック報告書として出してもらうことになる。途中経過について説明があつたということ。

Q : 口頭で指導とのことだが、具体的にどうするということを行ったのか。

A : ない。

Q : 東電もなにをすると言ってきたか。

A : ない。

Q : それはバックチェックに反映させるための作業だったのか。

A : 広い意味ではそういうこと。バックチェックで評価を求めているので。

Q : 結果論として10mを超えた。本件は、これまで明らかにしてないのでは
ないか。

A : まったくなかったかどうかはわからない。

Q : 数字だけで、詳細な報告内容はなかったのか。

A : 2009年は本当に口頭だけ。今年の3月7日、簡単ではあったが、いく
つかのケースについて計算した結果を聴いたと聴いている。

Q : いくつかのケースとはどういったことか。

A : いくつかのモデルと思う。貞観の地震と地震調査研究推進本部の見解とか
を基に試算したと聴いている。

Q : 10mを超えて何mだったのか。

A : 10mくらいだったと聴いている。

○?

Q : いくつかのモデルとのことだが、貞観地震は、はいっているか。

A : 今年3月に説明を受けたものには入っているようだ。

Q : 地震調査研究推進本部については、どのようなことを踏まえたか。

A : その時点の地震調査研究推進本部の見解を踏まえたモデルだったと聴いて
いる。

Q : 計算方法は土木学会のものか。

A : わからない。

Q : 東電は、どういう趣旨で説明を持ってきていたのか。

A : 東電から説明あったということ。

Q : 説明しにくるということは、保安院にアドバイスなり指導を求めてきたのではないか。

A : 一般的に計算結果が出ていれば説明に来ることはあり得る。中身の妥当性まで聴いてないが、対応必要と口頭で指導した。

Q : 1月、PSAの結果で10m超える津波の話について、東電がアメリカに論文を出していたと思うがそれとは別か。

A : 東電の論文と関係あるかわからない。

○

Q : 3月の東電の報告。こういう計算出たよということだけか、部会を設定してほしいとか、東電からなかったのか。

A : 簡単な説明受けたということ。

Q : 当局として、審議会を動かす動きにならなかったか。

A : WGやっているのだから、当然必要になる。

Q : 山田課長のところで、審議会を設定しないといけないと動いていて、地震が来てしまったというのであれば、話ができるがどうか。

A : その時点で、対応が必要と口頭で指導しているところまで。

Q : いきなり計算結果をもってきて、行政指導したのはよくわからない。

A : 当然、審議会での評価が必要になる。詳細は確認しないとわからない。

Q : 対応とは何を求めたか。

A : 確認する。

Q : これは3月11日以降、出ていない話か。

A : 出てないと思う。

Q : そこも含めて、原課に確認して。

A : わかりました。

○

Q：2009年の報告と、2011年の報告はそれぞれどういうものだったか。

A：今年3月、貞観の地震を想定したモデルと、推本を踏まえたモデルで計算した結果と聴いている。

Q：1Fに来る津波は。

A：10mを超えるという結果。

Q：それ以外は。

A：簡単な紙1枚とのこと。

Q：バックチェックの一環として東電が持ってきたか。

A：当然、指示しているので、すべての作業はバックチェックで確認していく。その評価はバックチェックの議論の俎上に上がっていくものと承知していた。

Q：口頭指導とのことだが、どういう対応とったのか

A：確認して回答する。今年に入って10mというのは、はじめて聴いたということ。

Q：東電は、この解析をいつ出したと言っていたか。

A：保安院は3月7日に資料で説明受けたということ。

Q：2009年はどうか。

A：2009年9月、6m超えると口頭で説明受けたと

Q：それは貞観の地震を踏まえてか。

A：正確なところわからない。

○

Q：今年3月7日の対応レベルは。

A：保安院は室長が対応。

○
Q：時間あけて担当連れてきてほしい。何か東電に聴取をかけたのか、東電から自主的にきたか。

A：自主的とのこと。3月7日に説明を受けて、課のレベルでどういう対応を求めているか、東電の説明者のレベル、それから、東電からアプローチがあったかどうかについて確認してくる。

17:15 <中断>

17:41 <再開>

(質問回答)

- ・本年3月7日の保安院の対応について、2つのことを言った。報告書を早く提出するよということと、設備面での対応が必要ではないかと指摘した。
- ・合同WGを設置している。3月7日時点で具体的なアクションは起こしてなかった。具体的な審議の段取りまで準備するに至ってなかった。
- ・対応レベルについて、保安院は室長、東電は課長クラスとのこと。東電に聴いてほしい。
- ・東電から話をしたいと来て説明を受けた。
- ・2009年の9月の関係、資料をもらってないので、明確ではないが、「佐竹ほか2008」という論文を基に、仮に評価すると6mを超える旨の説明を受けたとのこと。
- ・保安院側としては、今年の3月に東電から説明あったのは、貞観地震の断層をふまえたものと、地震調査研究推進本部の見解を踏まえた計算結果。

Q：佐竹ほかの論文とはどのような論文か。

A：2008年の論文と聴いている。

Q：津波に関する論文か

A：今すぐにはわからない。

○

Q：2007年と2011年の東電からの説明は、両方とも1Fについての説明で、2Fは含まなかったのか。

A : 今年3月は、1F、2F両方について説明があったとのこと。サイト前面で10mを超える結果だったのは1Fだった。2Fの1から4号機前で10mにはなっていない。

○

Q : 本年3月7日に報告を受けたのは森山さんは知っていたか
A : 保安院にいなかったのだから知らなかった。

Q : 知ったのはいつか
A : 震災後に説明があったことは聴いていた。

Q : これまでこの話が出てきてなかったとしたら、それはどうしてか。
A : 事故の経緯含め、検証委員会で調査されている。保安院として求められれば対応する。これに限らないが、東電でどういう検討していたか分からないが、検証委員会で検証されていくと認識。

Q : 保安院として公表は差し控えていたのか。
A : どこまで何を説明していたかは検証員会で。保安院としては説明している。

Q : 保安院は、3月7日に東電から説明を受けたことを事故調に説明したのか。
A : どこまで説明したかは、検証員会に問い合わせしてほしい。

○

Q : 事故調に説明とのことだが、IAEA政府報告書に出てきてしかるべき。議論にならなかったか。

A : どこまでどういう議論があったかわからないが、津波評価については、不十分と書かれている。この3月の問題を別としても、津波評価が十分でなかったことはIAEA報告書に書かれているとおり。

Q : この件について、報告書を書いていた広瀬さんに説明したか。
A : 私はわからない

Q : 3月11日以降、この件について東電と話しているか
A : わからない。

○ [REDACTED]

Q : 09年の件、6m超えると聴いたとき、指導しなかったか

A : してない。

Q : このとき対策をするべきだったのではないか。

A : その時は組織として聴いていたわけではなくて、担当が聴いていたということで、保安院として承知していたわけでない。

Q : ありえない。

A : 問題があったかどうかは検証の対象になると思う。

Q : 担当者は聴いていたが、上にあげてなかったということか

A : どこまで説明したか、それ自体が検証の対象。

Q : 室長、課長まであがってなかったと。

A : 私は知らなかった。

Q : 本来、室長に上がっていれば、どういう対応をするべきだったか。

A : 耐震バックチェックの一環、津波も含めて報告書出してもらって、専門家に見てもらうべきこと。

○ [REDACTED]

Q : 本年3月7日に、そういった報告がありながら、こういった事態になったことをどう受け止めているか。

A : 検証されないといけないが、いずれにしても、このような大きな津波が発生して、規制機関として、十分対応されていないということは事実、大変問題あったと認識。その後の、全電源喪失等、結果的に不十分、誠に申し訳ないと思っている。

○ [REDACTED]

Q : 事故調に説明した経緯について。

A : いろんな形で申し上げるのは控えたい。

Q : プラントの前面とはどういう意味か。

A : プラント1から6号機の正面で10mを超えるということ。

Q : 港湾の脇はもっと超えていたか。

A : そうなると聴いている。

Q : なぜか。防潮堤がなかったからか。

A : わからない。

Q : 2009年と2011は別と言っていたが。

A : 佐竹ほかの論文、推本の見解、貞観の最近の結果踏まえた評価の説明を受けたということ。

Q : 最新の知見を使ったモデルを作って

A : 東電として評価したもの。

Q : それを報告書で提出すれば、保安院は評価すると

A : そういうことになっていた。

○

Q : 10mを超えるのが1つか。貞観踏まえたのと、地震調査研究推進本部と2つか

A : あと学会で3つある。

Q : どれが、10m超えていたか

A : 推本だと思う。

Q : 他は超えてなかったか

A : 分からない。

Q : 聴いて確認してほしい。

Q : 2Fについても同様。

Q : 資料もください。

A : 東電の資料。勝手に出せない。手続き対応する。

Q : 推本はM8だったか。

A : M8. 5が三陸から房総であり得るという考え方だった。

18 : 08 <中断>

18 : 22 <再開>

- ・津波の高さについて。土木学会、推本、貞観ふまえた3つのモデルがあった。
10mを超えていたのは推本だけ。推本での考え方を踏まえて東電が作ったモデルでは、1F5、6号機前面が10.2mとなっている。防波堤外の北側で13.7m、防波堤外の南側で15.7m。
- ・2Fは、いずれも10mを超えてない。防波堤外南側で15.5mだった。

Q : いずれも敷地内か

A : 防波堤の外だが敷地内。

Q : 土木学会はどうか。

A : 土木学会モデルで一番高いところ、1Fで6号機、6.1m。防波堤北OP13m、南OP10mで浸水しないということだった。貞観地震モデル1Fで9.1mが一番高い。防波堤浸水しない。2Fも防波堤外側で浸水しないという評価だった。

Q : 土木学会の2Fはどうか

A : 2Fは5.2m。

Q : 推本の三陸から房総でM8.2について。平成21年に公開されたものか。
21年3月9日に改定というのがある。

A : ちょっとわからないが、M8.2の可能性があるとこの考え方を踏まえている。

Q : 当時指導した、報告書を出すようにとは、この津波に限ってか。

A : バックチェックの報告書を早く出すようにと言った。

Q : 推本モデルについてもう一度言って。

A : <推本モデル>

1号機8.7m、2号機9.3m、3号機8.4m、4号機8.4m、5、6号機10.2m。

Q：浸水するか

A：10.2mなので、敷地は浸水する。

Q：これまで土木学会で5.7mと言っていたが、それとは違うモデルなのか。

A：わからない。

<土木学会モデル>

1F1号機5.1m、2、3号機5.5m、4号機5.6m、5号機6.0m、6号機6.1m。

2F1号機5.4m、2から4号機5.2m

<貞観モデル>

1F1から4号機8.7m、5号機9.1m、6号機9.2m

2F1号機8.0m、2、3号機7.8m、4号機7.9m

Q：東電は、この解析をいつ出したか。

A：わからない。

Q：推本2Fをもう一度言って。

A：1号機7.6m、2号機7.2m、3号機7.8m、4号機8.2m

<質問回答>

A：水処理の稼働率について、アレバ・キュリオンが59.8%。サリー1系列運転100%として、84.3%。

18：34

以上